漢字教材用データベース作成に向けて

加藤扶久美・岩本阿由美・遠藤祥子・小西香織・横堀慶子

要　旨

日本語学習者が漢字を体系的に学習するためには，既存の漢字用テキストだけでは十分とは言えない。

筆者らは，漢字プロジェクトを立ち上げ，本学の日本語学習者（漢字圏・非漢字圏）が，各々の能力とニーズに合った漢字学習ができるように，漢字教材用データベース作成を目指している。本稿では，本学の漢字学習の現状と問題点，本プロジェクトで目指すもの，さらにデータベース作成に関する中間報告と今後の課題と展望について述べる。

【キーワード】データベース，漢字教材，漢字圏，非漢字圏

1　はじめに

富山大学留学生センターにおいて外国人留学生に対する日本語教育を行うために，日本語研修コース（以下，「研修コース」と略す）と日本語課外補講（以下，「課外補講」と略す）の２つのコースを開設している。文法を中心とした総合的な日本語能力を体系的に身につけさせるために，初級クラスにおいては両コースとも『みんなの日本語初級Ⅰ，Ⅱ』（以下，『みんなⅠ，Ⅱ』と略す）を，中級クラスにおいては，研修コースで『文化中級日本語Ⅰ，Ⅱ』（以下，『文化中級Ⅰ，Ⅱ』と略す）を，課外補講で『現代日本語コース中級Ⅰ，Ⅱ』（以下，『CMJⅠ，Ⅱ』と略す）をメインテキストとして使用している。

ところが，これらのテキストに出てくる漢字を含めて体系的に漢字学習するための適切なものがないので，漢字圏と非漢字圏それぞれの外国人日本語学習者のニーズにあった漢字教材を作るために，漢字教材用データベース作成を試みることになり，平成15年３月に漢字プロジェクトを立ち上げた。メンバーは岩本阿由美，遠藤祥子，加藤扶久美，小西香織，横堀慶子で，技術サポートとして後藤寛樹が加わりデータベースの雛形を作成した。

本稿では，留学生が漢字を学ぶ際の問題点と本プロジェクトの目指すところを明らかにしてから，これまでのデータベース作成過程及び問題点，さらに今後の課題と展望について述べるものである。

1.1　漢字学習の現状

漢字クラスの受講生については，漢字圏・非漢字圏の違いだけでなく，その漢字能力は多様で，これまで教育を受けてきた教育機関や使用テキストによる学習漢字の違いも少なくない（加納・阪井 2003）。

本学においても，さまざまな背景を持つ学習者のニーズに応えられるように，研修コースと課外補講のそれぞれのコースで漢字学習に取り組んでいるところである。

研修コースの漢字学習においては，漢字圏と非漢字圏の学習者が同じクラスで同じテキストを使って学んでいる。初級クラスで『Basic Kanji Book Vol. 1』（以下，『BKB 1』と略す）を使用し，２日に１課進めてきているが，コース修了時に17課までの193字，18課までの205字，19課までの217字と，期によって学習漢字数に変化がでてきている。初中級クラスでは，１日１課で進め，『Basic Kanji Book Vol. 2』（以下，『BKB 2』と略す）の31課までの357字を学習した期もある。中級クラスでは『Intermediate Kanji Book Vol. 1』（以下，『IKB 1』と略す）の５課までの104字，９課までの200字を学習した期がある。中上級クラスと上級クラスでは，特に漢字クラスを設けずに読解の授業等で語彙

の中に出てくる漢字を，その読み方，意味・用法とともに学習している。

課外補講においては，漢字クラスを週に１コマ開講しており，毎期10人から20人の漢字学習を希望する学生が受講しているが，漢字習得段階は様々である。初回の授業でプレースメントテストを実施して，レベルの近い学生をグループに分け，さらに漢字圏と非漢字圏のグループに分けて，それぞれのレベルに合わせた指導をしている。漢字圏の学習者に対しては『漢字の道』を使用して，中国，台湾，韓国で使用されている漢字との比較をし，書き方・意味の違いを確認した上で，漢字の読み方を中心にした指導をしている。非漢字圏の学習者に対しては『BKB１，２』と『IKB１，２』を使用しているが，期によって，分けられたグループ内で多少のレベル差が生じたり，グループの数によって教師が直接指導できる時間に差異が出てくることもある。定着のために毎回確認テストを行っているが，自宅での復習と練習に委ねるところが大きい。

1.2　留学生が漢字を学ぶ際の問題点

非漢字圏の学習者が初めて漢字を学ぶ際には『BKB１』を使用して効果をあげているが，メインテキストの『みんなⅠ，Ⅱ』の中で使われている漢字が考慮されていない。また，既習漢字を繰り返してスパイラル的に指導することができれば，漢字習得にプラスになる。既習者については，それぞれの既習テキストや習得環境が異なるために，その漢字力の判定が難しいので，プレースメントテストの基準作りも課題である。

漢字圏の学習者に対しては，読み方を中心にした指導がなされているが，簡体字や繁体字しか知らない学習者にその違いは示せていない。また，非漢字圏学習者用の漢字テキストを余儀なく使用しているのが現状である

漢字学習は時間的に制約のある授業活動の中だけでは十分ではない。個人差を考慮した，学習者主体の自立学習に効率的に使える教材や，様々な専門分野の語彙を取り扱った教材が待ち望まれている状況である。

1.3　本プロジェクトで目指すもの

漢字学習は漢字テキストだけによるものではないので，メインテキストとの連動を考えた，体系化された教材を作る必要性がある。

さまざまな漢字能力を持った学習者が，そのニーズに合った学習ができるようにするためには，漢字教材用データベース作成が最適であると考えられる。データベースを使うことによって，教師は教材及び練習問題や試験問題の作成をすることができ，学習者は授業の予習，復習及び独習に利用することができるようになる。

太田・他（2002）は，上級漢字学習者を指導するために，学習漢字（日本語能力試験２級レベル）をデータベース化し，それと連動させて学習者の知識の差を埋めるための予習シート，授業で使用する問題シートや小テストなど具体的な教材作成に取り組んでいる。

本プロジェクトにおいては，初級基本漢字から上級レベルの漢字までを網羅し，全てのレベルで，教師と学習者がそれぞれのニーズに合わせて利用できる漢字教材用データベースの作成を目指すものである。

2　データベース

2.1　漢字データベース（漢字ＤＢ）

図１は漢字DBのカードの例である。

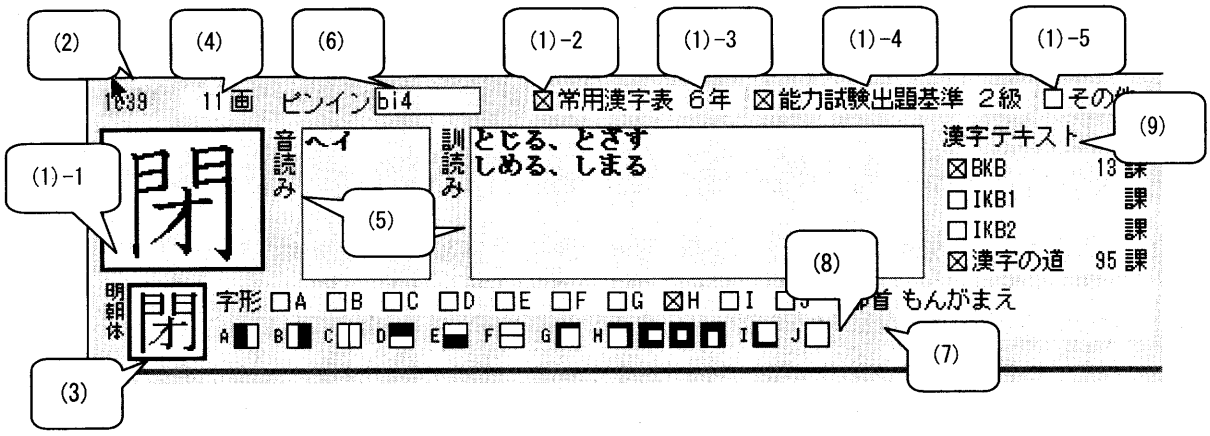

図１　漢字DB

（１）見出し漢字（2094字）

漢字DBは常用漢字表にある漢字1945字（学習漢字1006字を含む）と，日本語能力試験１級の出題基準にある漢字2036字（１級漢字表には第２水準漢字までを含む）と，常用漢字表にはないが人名，地名によく使われる漢字について，『外国人留学生の日本語能力の標準と測定（試案）に関する調査研究について』にある55字を網羅した2094字で構成されている。

①常用漢字表　　1945字
②１級漢字表　　2036字（第１水準漢字　1926字，第２水準漢字　110字）
③外国人留学生の日本語能力の標準と測定（試案）に関する調査研究について　55字

常用漢字表，能力試験出題基準の漢字表にある漢字は，それぞれチェックボックスにチェックを入れ((1)-2，(1)-4)，それ以外は「その他」((1)-5）とした。能力試験出題基準にある漢字は該当する級を入力した。また，学習漢字は学年別漢字配当表に基づき，その漢字を学習する学年を入力し，それ以外は「一般」とした（(1)-3)。

今後は，漢字圏の学習者への配慮として簡体字と繁体字を示し，一目で対照できるようにすることも考えている。

（２）通し番号

見出し漢字の通し番号は，漢字DB，語彙DB共通のものを使用し，両者を連動して利用できるようにするものである。

（３）字体

見出し漢字の字体は教科書体とした。手書きに近い教科書体と対照できるように，明朝体もその下に示した。

（４）画数

『日本語大辞典』にある総画数を入力した。

(5) 読み

常用漢字表をもとに音読み，訓読みを入力した。音読み，訓読みのいずれか一方のみのものもある。読みは太字，送り仮名は標準で入力した。読みと送り仮名の境目に「－」を入れたらどうかという考えもあったが，検索に支障が出る可能性があるので入れないことにした。漢字部分の読みが同じものは「、」，違うものは改行して入力した。

頻度が少ない読みについて，（　）に入れることも検討したが，上級レベルの学習者が本データベースを利用することも想定しているので，特に示さなくてもよいという結論に至った。

また，仮名が読めない学習者に対するフォローとして，ローマ字で読みを示すということも考えたが，漢字を学習する前に仮名は習得していると見なして，入れないことにした。

常用漢字表以外の漢字については，現在のところ能力試験出題基準の漢字表にある読みのみ入力してあるが，これだけでは不十分であると考えられる。今後，語彙ＤＢと照らし合わせて読みを追加することが課題として挙げられる。

(6) ピンイン

中国語を母語とする学習者は漢字から大体の意味を理解することができ，非漢字圏の学習者より有利な面はあるが，漢字の読みにおいては中国語の発音が影響し，かえって困難を感じる場合もある。そのような中国語話者が独習する時，漢字の読みを素早く調べられるように，中国語（北京語）の発音を基にしたピンイン（中国式ローマ字つづり）から漢字が検索できるように，このフィールドを作成した。

ピンイン入力については『中国人のための漢字読み方ハンドブック』を参考にしたが，四声（中国語の４つの声調）の示し方については，中国語を入力する場合に多くとられている方法（アルファベットの後に数字で入れる）を採用した。また，[y]の音を表す「ü」 に関しては，入力の便宜上，学習者が使っている以下のような方法を取り入れた。

①ü→ v　　例 nü→nv
②üe→ ve, ue　　例 nüe→nve,nue
（「ve」,「ue」いずれも使用されていることから，併記した）

また，「畑」や「塀」など国字にはピンインがないため，「国字」と入れてある。現代中国語に取り入れられている国字や発音が不明のものについては，今後，中国語話者を対象に調査し，できるだけピンインを入れていきたい。

(7) 部首

漢字を口頭で説明するとき，「『てへん』に『てら』(持)」のように字形を表すことがある。そこで，一般的によく知られている部首とその名称については知っておいたほうがよいと考え，部首のフィールドを作った。名称から検索する可能性は低いと判断し，一般的な名称のみ入力してはどうか，という考えもあったが，情報として知らせる意味で，すべての正式名称を入力することにした。

辞書によって部首の立て方や名称が異なるため，基準となるものを決めるにあたっては，いくつかの国語辞典や漢字辞典を検討した。その結果，見出し漢字がすべて出ていること，部首名が出ていること，漢字が探しやすいことなどから，『日本語大辞典』を基準とすることに決めた。

ただ，『IKB１』では，「字形のみからでも漢字が引けるように見出しを立ててあり，見出しの中には，字源的に意味を表すいわゆる部首とは異なる形のものも含まれている」と，字形索引の前書きにもあるように，康熙字典を基にしている『日本語大辞典』とは部首の立て方が違っている。異なるテキストを

使ってきた学習者に混乱を与えないように，部首フィールドに複数の名称を書き込めるようにし，１段目に『日本語大辞典』の部首名を，２段目に『IKB１』の字形索引用部首リストの中で『日本語大辞典』と異なる部首名を入力することにした。そのほか，「方」（ほうへん，かたへん）など名称が複数出てきたものは両方あげておいたが，「しんにょう」，「しんにゅう」は，「しんにゅう」に統一した。また，同じ名称で異なる部首を示す場合は，「ひへん（火）」「ひへん（日）」のように入力した。

表１　『日本語大辞典』と『IKB１』における部首の違いの例

見出し漢字	『日本語大辞典』	『IKB１』
術	ゆきがまえ	ぎょうにんべん
初	かたな	ころもへん
相	め	きへん
巡	まがりがわ	しんにゅう
勝	ちから	つきへん
将	すん	しょうへん
召	くち	しょう

上の表１にあるように，「術」「初」「相」「巡」「勝」「将」などは『IKB１』の部首の立て方の方が学習者にとってはわかりやすいと思われる。「召」は全体を部首と捉え，「紹」「昭」「沼」などの漢字の構成要素としてとらえている。

(8) 字形パターン

部首の知識がなくても字形の特徴から漢字が検索できるように，字形パターンを設けた。左右（A，B）上下（D，E），たれ（G），かまえ（H），にょう（I），全体（J）のAからJに大別した。特徴的なのはCとFである。「畑」のように，学習者がAかBか迷った場合，どちらからも検索できるようにCというパターンを設け，「窓」のようにDかEで迷った場合のためにFを設けた。

それぞれの漢字の字形パターンの決定にあたっては，部首にとらわれず，学習者が選ぶ可能性が高いものを選んだ。

(9) 漢字テキスト

研修コースと課外補講の漢字クラスで使用されているテキスト（『BKB１，２』『IKB１，２』『漢字の道』）について，見出しの漢字がどのテキスト，どの課に提出されているかを示した。『BKB』はVol.１からVol.２にかけて一続きの課構成になっているため，ひとつにまとめてある。『IKB１，２』でコラム欄と復習ページに提出されているものについては，それぞれ「コ１」，「R１」のように入力した。

2.2　語彙データベース（語彙ＤＢ）

語彙DBについては現在も入力作業を進めながら，対象語彙や入力項目等の詳細について検討しているところである。ここでは現時点でのデータベース作成の方法を記す。図２は語彙DBのカードの例である。

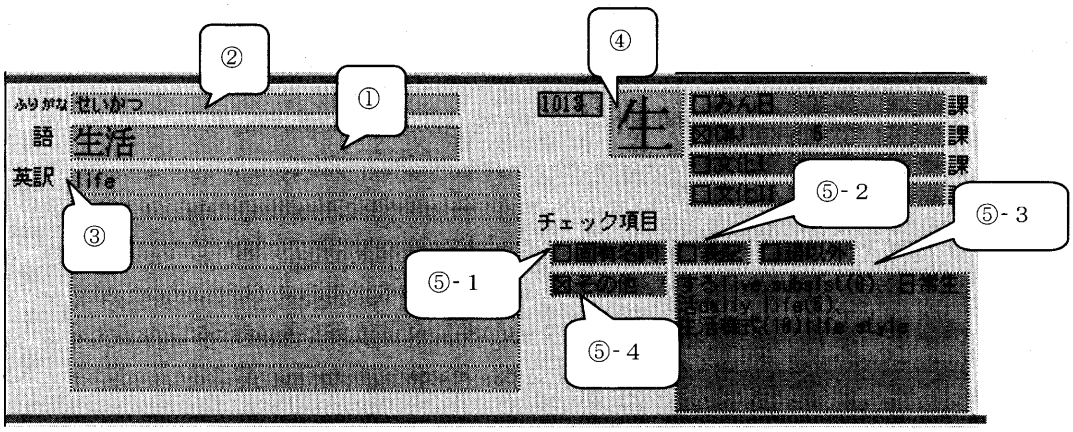

図2　語彙DB

(1) 対象語彙

語彙DB作成の対象としたのは，研修コースと課外補講の初級および中級クラスで使用している以下6冊のメインテキストの索引等から抽出した，漢字を含む語，表現文型，連語，接辞などである。

①『みんなⅠ，Ⅱ』の「索引」
②『文化中級Ⅰ，Ⅱ』の「各課索引」
③『ＣＭＪⅠ，Ⅱ』の語彙リスト

①では文単位で挙げられているもの（「。」や「？」で終わっているもの）を除いた。また，③の語彙リストとは，「会話ノート」の「Vocabulary list」や「読む練習」の「単語表」など，読みと英訳をつけてある語彙リストを指す。

現在の作業段階では，テキストでは平仮名表記であっても日常的に漢字で表記されることが多いものも抽出してある。これをどのように扱うか，また，その他固有名詞や合成語の扱いなどについても，検討を重ねているところである。

また，②には『文化初級日本語Ⅰ，Ⅱ』（以下，『文化初級Ⅰ，Ⅱ』と略す）で既出の語彙は提出されていないため，『文化中級Ⅰ，Ⅱ』に出てくる漢字を含む語彙を全てカバーできないのではないかということが考えられた。しかし，『文化初級Ⅰ，Ⅱ』索引と『みんなⅠ，Ⅱ』索引を照合したところ，大部分は重なっており，『文化初級Ⅰ，Ⅱ』にしかない語はほとんどが合成語か人名・地名などの固有名詞であることが分かった。合成語の場合は，分ければ『みんなⅠ，Ⅱ』に提出されているものも多いことなどから，総合的に考えて，現段階では『文化初級Ⅰ，Ⅱ』索引の語彙は今回のデータベース作成の対象から外すこととした。

(2) 入力項目

データベース作成作業の過程で必要な情報も含めて，現在のところ，以下の情報をまとめてデータベース化している。今後，さらに入力情報を追加または集約して，作成方法を検討していきたい。

①見出し語

い形容詞は言い切りの形，な形容詞は語幹，動詞については辞書形で示した。したがって，ます形で表示されている『みんなⅠ，Ⅱ』索引の動詞も辞書形に変換した。また，表現文型や連語，接辞なども見出し語とし，それらの被接続部分は「～」で表示した。

②ふりがな

カタカナ表記の部分や平仮名表記の部分も含めて平仮名でふりがなを入れた。また，見出し語で「～」を使用している部分はそのまま「～」を用いた。

③英訳

索引等に英訳があるものは，それを入れたが，『CMJⅠ，Ⅱ』の英訳は本文の文脈に合わせた意味であり，一般的意味ではないものがあるので，そのまま採用できない場合がある。また，索引等に英訳がないものについては辞書を参考に入れることになるが，詳しくは今後の検討課題としたい。

④見出し漢字と通し番号

見出し語に含まれる漢字を1字ずつ示した。また，通し番号は漢字DBと同じである。

⑤チェック項目

以下に該当する場合，各欄にチェックを入れた。

「固有名詞」：固有名詞に分類できるもの。テキストの索引等に分類がある場合は，それに拠る。

「表記」：テキストでは平仮名表記で，日常的には漢字表記されることが多いと思われるもの。

「語以外」：表現文型や接辞など，単独の自立語以外のもの。

「その他」：見出し語について，次のような付属情報があるもの。詳しくは備考欄に記した。

- 「する」をつけて動詞になる。
- な形容詞として使われる。
- 「に」をつけて副詞として使われる。
- な形容詞であるが，名詞に続く場合は「～の」という接続の形をとる場合がある。

これらの見出し語に関する付属情報については，それぞれの用法で初めて提出されている課が備考欄に記入してある。また，見出し語が接辞の場合は，テキスト中のそれを含んだ派生語とその語の初出課が入れてある。

3　漢字クイズ

漢字プロジェクトとして，富山大学留学生センター「日本語学習支援サイトRAICHO」の漢字クイズの作成[1]のため，『BKB1，2』第4課から8課，25課から30課の問題を試作し[2]，「RAICHO」プロジェクトで取りまとめた問題文と選択肢のチェックを行った。

WEB問題作成ツール（http://www.iwai-h.ed.jp/~irie/javascript/webquiz/）を利用し，漢字の「読み方」・「書き方」の四択問題を試作した。『BKB1，2』の第1課から45課まで3課ごとに計15レベルを設定し，各レベルで「読み方」・「書き方」，それぞれ10問が出題されるようになっている。それぞれのレベルには全部で45問前後の問題が準備されている。ここから10問がランダムに出題されるようになっているので，再度同じレベルの問題を解く場合，全く同じ内容で出題されることはない。また，『BKB1，2』を使用している学習者がそれぞれの段階で独習できるように，未習漢字にはふりがなを，難しいと思われる語彙には英訳を付けた。

問題のチェックに際して，次の3点が問題となった。1つ目は，「書き」クイズが書くことを確認するためのクイズであるにもかかわらず，選択問題とせざるをえなかった点[3]である。2つ目は，非漢字圏の学習者がきちんと字形を覚えているか確認するために，現実にはない漢字も選択肢に入れるのが望ましかったが，それを実現しようとすると選択肢をすべて画像化する必要があるため今回は実現できなかったという点である。

3つ目は文脈から漢字を選びやすくするか否かという点が問題になった。まったく漢字だけを問うのであれば，文章の中で漢字を問う意味もなく，文脈から選びやすくする必要もない。しかし，ある語が，ある程度決まった文脈の中で使われることが多いのであれば，その文脈の中でその語を覚えていくことには意味があるという考えから，無理にわかりにくい文脈の中で漢字を問うようなことはしなかった。

正しくない選択肢は，「形の似ているもの」，「読みの似ているもの」，「意味が似ているもの」など，いくつかの観点から作成した。特に「読み方」の問題では，中国語、韓国語などの漢字の発音の影響から間違って選びそうな読み方を入れたり，「撥音」，「促音」，「濁音」など学習者にとって聞き取りが困難なものを選択肢に入れたりすることによって，学習者の気付きに繋がるようにした。

下の図3は漢字クイズの例である。

図3　漢字クイズ

4　今後の課題と展望

本データベースは漢字DBと語彙DBのいずれも作成の途上にあり，試用版完成さえも，まだ手の届く範囲にはない。実際に学習者や教師が活用するまでには，利用方法を説明したマニュアルの作成も当然必要である。また，試用版についてもその評価を踏まえてさらに改訂を重ねていくことになる。未だ数歩踏み出したところであり，課題山積の状態ではあるが，以下，今後本データベースが果たす役割の可能性とその展望について述べる。

まず，本漢字DBは，初級基本漢字から上級レベルの漢字までを網羅しており，プレースメントテストから最終評価まで，コース全般で使用する教材作成への活用を視野に入れている。しかし，本データベースが実際の学習活動で具体的にどのように活用できるかは，これからの検討課題である。本大学の

漢字クラスの使用テキストも含めて市販の漢字テキストで想定されている練習について，認知心理学的見地からの分析もすでに行われている（小林 1998,1999）ように，これまで行われてきた学習活動を再検討し，学習者が必要とする漢字運用能力を獲得するための効果的な学習活動を設計していくことが求められる。

学習者の漢字学習の主たる目的である読解のための漢字の運用能力獲得（小林 1998）には辞書検索能力を身につけ，語構成についての認識を深める必要がある（カイザー 1998)。今後さらに本データベースの整備，情報の強化をすれば，辞書検索能力向上につながる入門レベルからの教室活動設計や教材作成への活用を考えることが出来る。その際，現在ほとんどの学習者にとって身近になった電子辞書による検索を前提とした教室活動も考えていく必要があるであろう。

また，専門分野に役立つ漢字の効率的な学習を進めるためには，初級から上級への段階的漢字学習だけでなく，専門書読解のための漢字を早くから取り入れた学習も必要である。理工系分野での学習漢字の選定など既に進んでいる（武田 1998）ものもあるが，本センターの場合，研修コースの学習者の専攻分野として多い薬学分野の語彙学習のための漢字の選定がまず求められる。

漢字教育については，書字教育一つ取ってもその必要性についての論議は未だ定まっていない（川瀬 1988，玉村 1993，市川 1998，和田 2002 など）ように，学習目標や具体的学習活動も多様なものが考えられる。E-ラーニングサイトなどさまざまなメディアを利用した漢字学習が可能になっている現在，日本語学習者をとりまく人間的・社会的環境も含めて学習環境を幅広くとらえ直す必要がある（市川 1998)。それを踏まえてどのように学習者の漢字学習を支援していくか，また，その中で本データベースがどのような役割を果たせるか，今後の検討を重ねていきたい。

注

(1) 漢字クイズ作成のとりまとめを後藤が行った。

(2) 4課から8課は1人1課，25課から30課は岩本が担当した。

(3) ＷＥＢ問題作成ツールでは解答入力式の問題も作成できるが，コンピュータ上ではかな漢字変換が利用できるので，解答入力式では変換候補を正しく選択できるかどうかを確認するのみになるため，選択問題とした。

参考文献

(1) 市川伸一（1998）「認知心理学と日本語教育」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.17-22

(2) 伊藤早苗・鈴木正子（2001）「日本語学習者の漢字辞書別使用ストラテジー－初級者と上級者の事例研究－」『北海道大学留学生センター紀要』第5号，pp.64-86

(3) 太田　亨・藤田佐和子・中村朱美（2002）「上級漢字教材作成プロジェクトについて」『金沢大学留学生センター紀要』第5号，pp.69-96

(4) カイザーシュテファン（1998）「『非漢字圏＝悲観事圏』脱却への道－漢字教育から語彙教育へ－」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.25-31

(5) 加納千恵子・酒井たか子（2003）「漢字処理能力測定テストの開発」『筑波大学留学生センター　日本語教育論集』第18号，pp.59-80

(6) 川瀬生郎（1988）「日本語教育における漢字」『漢字講座12　漢字教育』明治書院，pp.273-296

(7) 後藤寛樹・深澤のぞみ・濱田美和（2002）「コンピュータ用語のデータベース作成と特徴の分析－留学生の情報活用能力の養成を目指して－」『富山大学留学生センター紀要』創刊号，pp.3-14

(8) 小林由子（1998）「漢字授業における漢字学習－認知心理学的モデルによる検討－」『北海道大学留学生センター紀要』第2号，pp.88-102

(9) 小林由子（1999）「漢字教材における漢字読み練習の分析－入門期における教材の検討－」『日本語教育方法研究会誌』Vol.6，No.1，pp.16-17

(10) 武田明子・入戸野修（1997）「初級日本語を学ぶための理工系研究留学生のための漢字教授方法の提案」『平成

9年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.155-160
(11) 玉村文郎（1993）「日本語教育における漢字－その特質と教育－」『日本語教育』80号，pp.1-14
(12) 濱田美和・後藤寛樹・深澤のぞみ（2004）「日本語学習支援サイトの役割と効果－大学における総合的日本語学習支援体制の構築とサイトの開設－」『富山大学留学生センター紀要』第3号，pp.1-14
(13) 藤井涼子（1997）「漢字教育」『日本語教育』94号，pp.85-90
(14) 和田衣世（2002）「中国人学習者向け漢字教材の必要性について」『北海道大学留学生センター紀要』第2号，pp.88-92

参考資料

(1) 梅棹忠夫他監修 (1989) 『日本語大辞典』講談社
(2) 大越美恵子・高橋美和子編 (2002)『中国人のための漢字読み方ハンドブック』スリーエーネットワーク
(3) 外国人の日本語能力に関する調査研究協力者 (1982) 「『外国人留学生の日本語能力の標準と測定（試案）に関する調査研究について』の報告」文化庁
(4) 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵里子 (1999)『Basic Kanji Book Vol. 1』第3版，凡人社
(5) 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵里子 (1999)『Basic Kanji Book Vol. 2』第3版，凡人社
(6) 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵里子 (2001)『Intermediate Kanji Book Vol. 1』第3版，凡人社
(7) 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵里子 (2001)『Intermediate Kanji Book Vol. 2』凡人社
(8) 国際交流基金・日本国際教育協会 (1994) 『日本語能力試験出題基準』凡人社
(9) スリーエーネットワーク (1998)『みんなの日本語初級Ⅰ』スリーエーネットワーク
(10) スリーエーネットワーク (1998)『みんなの日本語初級Ⅱ』スリーエーネットワーク
(11) 豊田豊子 (1990)『漢字の道』凡人社
(12) 内閣 (1981) 「常用漢字表」内閣告示第一号
(13) 名古屋大学日本語教育研究グループ (1998)『現代日本語コース中級Ⅰ』名古屋大学出版会
(14) 名古屋大学日本語教育研究グループ (1999)『現代日本語コース中級Ⅱ』名古屋大学出版会
(15) 文化外国語専門学校日本語科 (1991) 『文化初級日本語Ⅰ』凡人社
(16) 文化外国語専門学校日本語科 (1995) 『文化初級日本語Ⅱ』凡人社
(17) 文化外国語専門学校日本語課程 (1999) 『文化中級日本語Ⅱ』凡人社
(18) 文化外国語専門学校日本語課程 (1999) 『文化中級日本語Ⅱ』凡人社
(19) 文部省 (1993)「小学校学習指導要領」『小学校学習指導書　国語編』ぎょうせい